

自然は多彩なワンダーランド。色と仲間をさがしに出よう

フィール・オブ・カラー

ねらい:

- 色を通して、他の人の感性を感じる。
- スケッチを交換することで、感性の交流がはかれる。
- スケッチをすることから自然をよく見る。
- 自然の色の妙に気づく。
- 他の人の意見に耳を傾けることにより、自分の自然感をさらに豊かにできる。
- 自然の不思議さ、おもしろさを伝える。

対象年齢: 小学校以上

人数: 4人以上

時間・時間帯: 60~90分・日中

場所: 野外

必要なもの: B 6 版程度の画用紙、色鉛筆(グループ数と同数のセット)

キーワード: 自然、観察、表現、感性、交流、発見

すすめかた:

- 1) 参加者を人数によって2~3つのグループに分け、それぞれのグループ内で、色鉛筆1本と画用紙を渡す。つまり、他のグループに自分と同じ色を持った人が、1人いることになる。
- 2) グループのエリアを決めて、その中で自分の持つ色鉛筆と同じ色の自然物を捜し出し、発見したものをスケッチして、同じ色の部分だけ色を塗るよう説明する。その後、各自で探索にでかける。
- 3) 頃合いを計って集合の合図を出す。全員集まった所で、他のグループの中から、自分と同じ色を持った人(2グループなら2人、3グループなら3人)をさがす。
- 4) それぞれのスケッチを交換して、相手の描いたものを探しに行く。ひとりで探し出すのが難しいような時には、場所等のヒントをだしながら行うのもよい。
- 5) 交換した相手と意見や感想を語り合う。

指導上の工夫・留意点:

- ・付近の自然の中には絶対になくと思われる色だと、参加者の意欲を喪失させかねません。下見である程度可能性のある色を選ぶのが無難でしょう。しかし、自然の中には思いがけない色が隠されており、難しい色を探り当てた時ほどその喜びは大きいもの。参加者の意識や意欲を見ながら考えていきましょう。
- ・色見本用の色鉛筆は、通常セット販売されている12色のものでもかまいませんが、参加者の興味をひきつけるという意味からも、バラ売りされているソフトな色彩のものがあるとうれしい。
- ・色鉛筆やペンは、色が塗れるというメリットがありますが、色見本を使うこともできます。これは広告等を切り抜いて簡単に手づくりすることも可能です。

参考: 仁井雄治「Coppice」第9号 1994, EENet

気に留めることで見えてくる動物達の姿。まねっこすると自然のフシギが見えてくる

生きものパントマイム (ANIMAL CHARADE)

ねらい:

- 野生生物とはどういうものか定義できるようになる。
- 情報を身体で表現するきっかけをつかむ。
- 生き物を観察する時に、重要になるポイントをつかむ。

対象年齢: 小学校4年生以上

人数: 最大30~40人

時間・時間帯: 30分程度、いつでも

場所: 野外、室内。落ち着いて過ごせる雰囲気の良い場所

必要なもの: 生きものの名前を書いたメモ、それを入れる袋、その生き物に関する資料

キーワード: 体で表現する、記憶、協力、生き物

すすめかた:

- 1) 1人1枚あるいは2~3人に1枚の割合でメモを配り、生きものの種名を1つだけ書いてもらう。あまり詳しい名前でなくともかまわない。また、人間などの場合、個人名は書かない。メモに書いた内容は、秘密にしておくように伝える。
- 2) 折り込んだメモを回収し、不透明な袋に入れる。
- 3) ゲームのやりかたを説明する。
 - ・1人あるいは2~3人のグループで、メモをひいてもらい、書いてある生き物についてのパントマイムを全員が協力して演じる。パントマイムなので、声は出さないこと。どんな模様をしているか、どんな身体の特徴があるか、どんなところに棲み、なにを食べて生活しているか、もし見たことのある生きものだったら、その時、その生きものはどんな風に動いていたかなど、具体的に演じる。
- 4) 全員の演技が終了したら、それぞれの生きものについて、野生の生き物か、ペットなのか、どこに棲んでいる生き物かなどについて話し合う。その他、出てきた生きもの同士はどのように関係しあっているか、どんな生きものにとっても生きていくのに必要なものは何か、などについて話しあう。

指導上の工夫・留意点:

- ・2~3人で演じる場合、周りの環境を演じる役と、生きもの自体を演じる役との2役制か、全員が1匹の生きものを演じるかグループごとに話しあって選ぶとよい。
- ・グループを半分に分け、先攻グループと後攻グループをつくり、演じたりその生きものを当てたりする。
- ・演技開始
当てる方は、種名がわかったら、鼻の頭を指で押さえる。演じている人が、指してくれるまで、答えは言わないこと。
- ・活動に入る前に、野外で生きものを観察したり、活動後にその生きものを実際に観察し、新たな視点で生き物を見ることにも発展できる。
- ・自己紹介・導入の活動としても利用することができる。
- ・さらに発展させ、その場所の生態系を、劇として演じることも可能である。

出典: "Project WILD (Western Regional Environmental Education Council)"

抄訳: 生態計画研究所 (1994)